

玉ねぎ生産を中心に、昔の札幌の農業の様子をまとめた「北のたまねぎ—札幌黄を育てた人たち」

郷土史研究会

昔の農業 一冊に

札幌の郷土史研究グループ「札幌村歴史研究会」が札幌の玉ねぎ栽培の歴史をまとめた「北のたまねぎ—札幌黄を育てた人たち」(北海道出版企画センター刊)を初めて出版した。企画した同研究会の主婦土肥信子さん(60)「札幌市東区」は「若い世代に読んでほしい」と話している。



関係者証言 5年かけ収集

札幌の玉ねぎ栽培は東区を中心に盛んだが、近年、宅地開発の後継者不足などで畑が徐々に消えている。昔の様子を知るお年寄りの数も少なくなっており、農業にはほとんど縁がなかった大学教授や会社員、主婦の五人のグループが玉ねぎ栽培の歴史の一端を伝えよう、と出版を企画した。

一九九三年から東区内の六十一・九十三歳までの男女十一人を繰り返し訪問しては、古くは明治末期から玉ねぎ栽培に携わってきた人たちの証言を約五年かけて整理してきた。本は、地域の十一人がそれぞれの思い出を語る形でもとめた。土壌づくりに除草などの苦勞のほか、祖父と両親から聞いた開拓期の札幌の様子なども含まれている。

開拓期の思い出も

大正時代に農家に嫁ぎ、東区に七十年以上住む佐藤アサ子さん(81)は「親は子供に手をかけられませんが、赤ちゃんが動くようになったら、ある程度の長さのひもで縛りつけておきました」と、夜明け前から農作業に従事し、家事、育児すべてをこなさねばならなかった当時の生活を振り返っている。

札幌市によると、市内の今年の玉ねぎ作付面積は六百二十三畝で、ピークの一九七〇年の千二百七十畝の半分以下になった。

本は袋型Aと判百八十二円、初版千五百部発行。税別で一部千五百円。市内の主な書店で扱っている。

札幌の玉ねぎ 歴史に光